

OVER80 教育分科会
「幸せな小学生を増やす」
要旨集 v1

2023 年 3 月 5 日

保坂 洋（編）

〈目 次〉

1. 私の素朴な小学校教育改善提言要旨：本田安弘	3
2. 小学校教育に関する考察：金井勇司	4
3. 日本の新しい時代は小学校教育の革新から：河原春郎	5
4. よりよい小学校教育のために：田部揆一郎	6
5. 新しい小学校生活を送ろう：西村二郎	7
6. 教育を考える：濱本龍彦	8
7. 小学生の私と80歳の私：保坂洋	8
8. 教育改革へ向けての提言書：南井克之	9
9. 教育について、自己経験と感じたこと：宮崎泰雄	10

私たち OVER80 の仲間は、小学校教育の重要性を確信し、その改善・改革を強く願っている。意見交換や有識者・現場を知る先生方の講演などを学習する過程で、小学校教育に関する不満や要望が多く出た。例えば・・・、

- ・考える力を養う教育、個性を伸ばす教育こそ重要
- ・教育人材の育成、質の向上、働き方改革、社会的地位の向上
- ・日本の教育予算は先進国最低。思い切った国家投資が必要
- ・文科省行政の弱体化（経験・資源の蓄積不足）、変化を嫌う教育岩盤の打破。等々

<教育改革の目的・狙い>

根本は「子どもファースト」、子どもの利益を第一とする。あくまでも「子ども自身」のための教育を考えること。まず、子どもたちを幸福にする教育制度・施策が求められる。

子どもたちが「自ら考え、判断し、決定し、自ら行動すること（自律する力、自己肯定感）を身につけさせる教育制度が求められる。

<専門家による検討・提案の在り方>

私たちは教育の目的をどこに置くかを提案し、改善ポイント・与条件を提示できるが、教育専門家ではない。諸外国の先進の制度や日本の教育の流れにも知識は浅薄だ。制度改革の検討に当たっては、教育に深い見識のある研究者や有識者などの英知を集めて、覚悟を持って腰を落着け、真摯に真剣に議論して欲しい。お役所の原案・思惑を追認する会議であってはならない。

国内のみならず、世界に範となる教育制度のあるべき姿を提案してもらいたい。教育に関する考え方、教育政策において子どもの Well Being への配慮、国連子どもの権利条約の遵守を大前提としてもらいたい。

<検討会編成の留意点>

端的に言えば、教育を“喰い物”や“踏み台”にする人たちを参画させないことだ。己を利するために「教育」を利用する政治家や、良心・節操のない忖度意見に固まる御用学者は、排除されなければならない。また、経済界の“即戦力人材”期待に類する、自己中心的要求には動じないようにすること。

<成案後の推進>

ハード・ローとソフト・ローの発想で、改革推進に取り組む。また、制度推進とは別に、各学校での改善・改革の好事例、先進事例の水平展開の促進を支援することも大切だ。地域住民の協力も求められるだろう。

<結論>

人びとの幸福を最優先した理念を持って、国が公助の姿勢で、国民と共に「学び」の場を何にもまして

充実させることを、私たちは切望している。

以上

小学校教育に関する考察

要旨

金井勇司

私は、1946年4月、小学校へ入学しました。正に、戦後教育の第1期生です。当時は、日本中が貧困で、食料、物資共に不足し、大変な時代でした。親の苦労は大変なものがあったと想像出来ます。校舎もなく、他の小学校の軒下を借りて、授業が行われました。もちろん、教科書などはなく、わら半紙にガリ版（謄写版）で印刷されたものだったと記憶します。アメリカから無償で支給されたという大変まずい脱脂粉乳を湯で溶いて無理に飲まされました。また、蚤や虱（しらみ）を取るために整列させられ、頭から DDT（白い粉の殺虫剤）を掛けられたりもしました。

小学校時代、学校でどのように教育を受けたのか全くと言って良いほど覚えていませんが、今から思うと、貧困なりに、楽しく過ごしたように思います。

1962年、大学を出て、社会に出ました。日本が高度成長に突入したころでした。当時は、土曜日が半ドンで、祝祭日も今日ほど多くはなかったと思います。とにかく、残業に次ぐ残業で、夜中の12時過ぎに帰宅する日も多く、がむしゃらに働かされたように思います。

今から30年ほど前、日本のGDPは、奇跡の成長を遂げ、世界第2位にまでのし上がり、“Japan as No. 1”などともてはやされるまでになりました。子供のころの最貧困時代とは雲泥の差です。

昼間から、家を施錠するということはなかったと思います。オレオレ詐欺もありませんでした。今日のような組織的な悪質な犯罪もあまり記憶がありません。

現在、日本は物資面では豊かになりましたが、治安面では、はるかに悪くなった気がします。国の最高機関である国会での答弁を聞いていても、時には、信じられない発言もあります。

どうして、こんなにこすからい世の中になったのでしょうか。「三つ子の魂百まで」という諺の通り、子供の頃の教育が、人格形成の基礎になっていると考えれば、現在の小学校教育に問題があるのか、少し、考えてみました。

以上

日本の新しい時代は小学校教育の革新から（要旨）

2023年1月18日 河原春郎「教育システムへの提言」

1. 「前例を教えて覚える」から「自ら参画して学ぶ」小学校教育で日本を革新

日本の社会文化、産業が今や危機的な状況で、この要因は、過去の成功体験から、前例主義にとらわれ、「前例を教えて覚える」という今の小学校教育にあり、これを「自ら参画して学ぶ」即ち「自分の考えを発言し皆での討議から学ぶ」に革新し「学びが好きになる、面白くなって」日本を革新したい。国際バカロレア教育がその一例。

2. 「基礎的なツールは教える」

学びのための基礎的な言語、算数、その他の「基礎的なツールは教える」

3. 「ディベート」

自らの考えを発言し「皆で討議する」ことが楽しくなる習慣を身に着ける。

多くの人の発言の「多様な考えを受け止め(単なる受け入れではない)」、クラスを社会と考へて、「その社会が良くなる考えを受け入れ、皆で実行する」習慣を身に着ける。多様な民族の「世界をもっと知る」機会をつくる。

「現場の教育者への助言、著者の体験編」

世界各国で、多くの違った民族の人たちとの交流をした体験から、多様な民族の集まる、例えば米国では、必然的に上記を実行していると思いました。

1. 会議に集まって議論するとき、「必ず自分の考えを発言する」

日本人は、会議に出席して、他の人たちの発言をメモして、唯聞いているだけ、情報を取りに来るだけの人が始どと言われ、私も実感しました。

2. 自分の考えの発言と多様な議論により、「新しい価値や革新を生む」

多様な民族、出身の人の発言から、多様な考えを聞き、議論することで、全く新しい発見や、アイデアが生れ、そこから新しい価値や革新を生む。

3. 「ドキュメンテーションに残して」多くの人に情報を正しく共有する

このような多様な発言や、その議論の結論を、ドキュメンテーション、書いたものに残して、多くの人と同じ情報を正しく共有して、大きな力になる。日本は、口伝（くでん）の文化、書くことが苦手な人が多い。日本は、米国の真似、改良し、習熟による「ものづくり」で、高度成長期の大きな発展をしてきたが、今や現状維持から衰退の危機に瀕している。

日本が自ら、世界を席卷する様な新しい産業を作り出せないのが、上記のような「前例主義の社会文化」に根差していると実感しています。

以上

1. 小学校時代

小学校は、子供が親から離れて、初めて学校という社会生活に入るときで、そこで得られる体験は、のちの人生に大きな影響を及ぼす。

先生の話すこと、やること、表情、友達とのふれあい、学校の規則に従うことなど、どれも初めての経験で、柔軟な子供の心に強く残る。

2. なにを教えるべきか

無論、のちの人生に必要な読み書き、算数、社会知識など必要だろうから、これらは欠かせない。

しかし、それらに偏重して、下記を忘れないでほしい。

*自分の意見を言う。クラスに討議する時間を入れてほしい。

*友達と仲良く遊ぶ。他人から逃避することなく、社会性を身に着ける。

*温かい心。友達への思いやり、先生の生徒への接し方から学ぶ。

*科学、文学、芸術、音楽など、それぞれがどんな世界なのか、子供がのちに自分で調べられるような、糸口を与えてほしい。

3. 親に臨むこと

子供を塾に入れ、いい成績にして、いい学校に入れ、いい会社に入るのが、子供の幸せと考える親があまりにも多い。

しかし、この型にはまった過程を取ることにより、多くの失われるものがあることに気付いてほしい。

スポーツでえられる丈夫な肉体、音楽、芸術から得られる心の広がり、友達と付き合うことから得られる社会性などなどである。

型にはまった教育課程からは、大人物は出てこないのではないか。

4. 先生、学校、教育委員会に臨むこと

先生が忙しすぎるという話をよく聞く。学校幹部、教育委員会、PTAなどへの説明資料を作るのにあまりにも多くの時間を取られているのではないか。

先生が、資料作りに追われて、肝心な子供の教育を考える余裕がなくなっているのではないか。

説明資料を簡略化し、説明頻度を最小限にする工夫をしてほしい。

先生が忙しすぎると、表情が暗くなり、子供に温かい心で接することに支障が出るのではないか。

以上

要 旨 「新しい小学校生活を送ろう」

2023 年 1 月 22 日 氏名：西村二郎

[教育システムへの提言編]

学校教育の最低限の目標は、職業に役立つスキルおよび、民主主義国の国民としての振舞い方を身に付けさせることだろう。私は教育関係者でない上に不勉強にして提言としてまとめるだけの能力は持ち合せないが、学校教育を経て、社会人、そしてシニアと歩む中で感じた教育上の問題点は多い。とくに社会に出てから、技術系の企業人として新事業立上げに従事したときの経験、そして俯瞰的にものをみる能力が増したシニアになってから体験したことの中で後進に言い残したいことがある。全ては小学校教育から始まっている。

[現場の教育者への助言、著者の体験編]

40 余年の企業生活において痛感したことは、原理原則を理解せずやり方だけを身に付けた“技術者”(工学部出身者に多い)の創造力の乏しさだった、これは、「博士」にも言えた。

ドクター論文関連の知識が増えただけで基礎の深堀が出来ていない博士(日本だけ?)は、新しい仕事では役に立たなかった。シニアになってから遭遇した郷里の穴道湖の水質問題に関する県の諮問委員会座長(一流大学教授)の明らかな間違い論文に象徴されるミスリード。地球温暖化問題に関する気温先行・CO2 結果説など、学者・研究者にも、研究能力を欠く“研究者”が多数存在していることを知った。さすがに基幹学会では排除されたが、“派生”学会では共存可能だった。背景には高学歴化と学界の“民主化”(悪平等化)がある。これでは、研究費の配分も悪平等。大型イノベーションは生まれず、日本の経済成長が低迷するのムリはない。企業の不祥事は後を絶たない。リーマンショック時に露見した不良債権問題は、アダム・スミスならずとも、市場経済にフェアな精神が不可欠であることを痛感した筈だ。

民主主義社会における市民の権利と義務に関してはもっと深刻だ。日本(民主主義国に共通する悩みといえる)の政治家は大衆に迎合することで地位を保っていると言っても過言ではないだろう。原因は国民一般の知的水準の低さにある。周囲を敵に囲まれ、生温い考えでは存続することさえ困難なイスラエルでは、一般市民の知的レベルが高いといわれている。

以上を踏まえて言いたい事：①基本原理を身に付ける。とは言え、ムリなことが多々ある(とくに小学校では)。その場合、教え方が重要だ。②自分の頭で考える習慣を身に付ける。③全ての児童の特長を見出し伸ばす。特長を発揮する場は学業に限らない。④本質を見極める能力の涵養(枝葉末節の問題と取り組んでも本質的解決にはならない)。⑤疑問に思うことは直ぐに調べる習慣を付ける(ネット検索で知識だけ得て満足するのではなく、それをきっかけとして基本原理も)。⑥児童が自分の力で「創造」したことについては、どのような小さなことでも、その意味と創造するに至った過程における努力を具体的に指摘して評価すべきである(3つの賞賛点と1つの改善点の指摘)。⑦フェアプレーの精神を植え付ける。⑧本質を分かり易くプレゼンする能力と聴き取る能力を身に付けさせる。

以上

要約

2023.1.16 濱本龍彦

I 「私の学校時代を振り返る」

終戦直前の 1945 年 7 月、米軍 B29 による爆撃で街は完全に壊滅し私達家族は家・財産のすべてを失った。終戦後の悲惨な状況の中で小学校に入学し私の学校時代が始まった。そしてその後、家族・先生方・多くの方々の指導・助言・励まし、そして自分なりの努力によって大学卒業まで漕ぎつけた。この過程で、知識を得るだけでなく、生きていくための姿勢、考え方などを徐々に醸成していったのだと思う。それらを赤裸々に記した。

そして末尾に「I の補足」として学校生活から得たことを纏めとして幾つかの項目を挙げてみた。

II 「人材観について考える」

大学までの学校生活、そしてその後長くビジネス活動に携わった。グローバルなビジネスに携わるが多かったのでそこでの自分の経験、体験も踏まえながら「人材観」について考えてみた。

III 「これからの教育を考える」

日本の将来は世界の中での競争を勝ち抜く人材の育成にかかる。ここでは小学校での教育について少しではあるが考えを纏めたので参考のため提示した。

以上

小学生の私と 80 歳の私

2023.2.8 保坂 洋

[要旨]

第二次世界大戦終戦直後に教育を受け、育った私の実体験から学んだことは、子供達は、劣悪な環境下にあっても、小さな体験からでも、学ぶことができるということです。最も身に着くのは、考え、行動し、結果を確認するという一連のプロセスを体験することです。学校で必要な知識を教えることは、とても重要ですが、同時に、教育インフラが当時に比べ飛躍的に整った現在、大いに活用して、探求的に体験学習を積み重ねることで、自分の明るい未来を切り拓く自信を持って生き活きと活動し「幸せを感じる生徒」が増え、そのような子供達の中から、成人して、世界に独創的なコンセプトを提案できる人物が現れると確信します。

- ① : この30年間に於ける我が国の国力の低下、政治の劣化、戦後の各国の経済成長や世界の動きに追い越されるようになった背景に、教育・入試制度に学習塾の存在を含む、我が国に特異な仕組みがある…と捉える。
- ② : 日本の小中校の教育は、制度（学習塾を含む）も仕組みも、大学入試の為の記憶による画一的な知識蓄積とその結果としての学業成績を重視したものであり、人間形成上、大事な小学生の時期に学びの基礎を身に付ける為の仕組みが無く、生徒個々の可能性を見出し、それを伸ばす、真にあるべき教育が行われてはいない…と捉える。
- ③ : 某社の海外駐在経験17年の内、妻と小学生の子ども二人を伴って、米国のNYに居住していた6年間に見聞したのは、公立の小学校は学びの基礎を（その後の人生に向けて）しっかりと身に付ける段階にある…と位置付けられ、運営されていたと思える教育の制度や仕組みであった。教育の重点は、生徒個人が独自に考える力、個性、独創力、発話力を身に付ける礎としての学び方にあり、低学年からホームルーム制を敷き、授業は科目別の専任教師（教科担任制）が行い、更に、科目の中でも能力別に（クラスの中も、グループ分けし、それにより、教師が生徒夫々の才能を見出し、それを伸ばす為の体制にあるように）行われて、それによって、学ぶ為の交流・工夫が図られていたようである。即ち、中学に進む前の小学校の段階では、知識というより、学び方、考え方、独創性を生む為の準備や人前での話し方を身に付ける、そのことにより、その後に関心を持ちたくなる専門分野を生徒自身が見出し、知識・能力を高める前の訓練の為の小学校教育が行われていると言っても過言ではないように思われた。
- ④ : 米国の中高大の教育には、飛び級、大学への推薦入学など、日本では一般化していない更に違った要素も加わるので、日本の教育改革を論じるには、複雑性が増す。また、小学校教育を変革することが出来れば、中高大の教育、制度、仕組みに向けての改革も加速し易くなると考える。数十年は掛かっても、小学校からの改革の第一歩を踏み出さなければ、日本全体に亘る、画一的な教育制度・入試制度や色々な仕組みは、いつまで経っても変わらない。
- ⑤ その教育改革の第一歩を踏み出す為には、政治、経済、芸術、特にスポーツの世界と同様、**現場の教育者が海外の制度や仕組みの実態を知ることによって、視野を広げることが不可欠であり、**
“井の中の蛙、大海を知らず”の状態から教育界が抜け出ること、**欧米諸国などの学校、また、日本国内在の外国学校との交流によって、教育者が日本との授業・仕組みの“違う”ところを見聞するという初段階の仕組み・プログラムが出来れば、“教育開国”に繋がるはず。**具体化には数十年掛かっても、例えば、先ず、東京都内などに規模は小さくて良いので、**モデル校・授業の設立を目指す**ことで、第一歩を踏み出すことが出来れば、前進であろう。交流の為の予算化も必要であるが、教

育改革への問題意識や視点を持ち、協力して貰える人材を見出し、連携し、具体化の切っ掛けづくりから始めたい。

「人新世を生きる君たちへ、次の日本への教育改革」なる書籍が、“次の日本への教育改革会議”から発行されたが、我々が目指すべきは、改革の対象を広げる、高等教育に至るまでの幅広い段階ではなく、先ずは、人としての物の考え方、色々な事象への関心を高める、色々なモノへの取り組み方、独創性を高める、発話力などの基礎が出来上がる大事な段階にある小学校教育に絞って、改革の検討を進め、如何なる制度や仕組みでの教育を目指すべきなのか、提言内容の更なるつめや裏付けを行い、提言を具体的に纏め上げたく思う。

要 旨（案 1）

2023 年 1 月 23 日 宮崎 泰雄

[教育システムへの提言編]

自分の少ない経験から、提言するほどのものではありません。経験から感じたものだけです。

[現場の教育者への助言、著者の体験編]

1. 海外勤務での子どもの教育の一端を見る中で、

・成績だけでなく、尖がったものが一人一人の子供にある。そして、それを子ども全てが、お互いに認め尊重する風土の醸成に努めることが大事と感じました。点数による成績の尺度のみで評価することは、子どもの将来への伸びしろを損なうことになる。

・今後、日本での一層多くの外国人家族が住むこととなります。外国人の親が日本で住み働くことが良かったと思えるのは、子どもが学校で楽しく、過ごせることが大きいと思います。そのためには、日本語の習得について、特別のクラスや先生を付けての支援体制を作る。外国人の子供が、早く、日本の子どもと言葉の GAP がなく会話し遊べるようにすることです。

子どもが、言葉の GAP が埋まらず、もし、日本を嫌いになってしまうことは、日本の国にとって、長期的には、経済・安保を含めて大きなマイナスと思います。

・対象は異なりますが、私の子どものへの英語教育への気持ち良い支援への恩返しとして、その万分の一ですが、日本の大学に來ている留学生への生活・語学への支援を 10 年ばかり続けています。

2. 日本を訪問した、米国の公立学校の先生の言葉から思うこと

米国勤務時に、日本人補習校が借りている現地校の先生を日本に定期的に招待する事業に携わりました。その帰国報告会で、現地校のある先生からは、「日本では、先生は尊敬されているので良い」との言葉が、今でも、印象に残っています。

かつ、赴任した地域（米国東海岸）では先生の処遇は、地域の経済力によるもので、処遇が地域により異なり先生も良い処遇を求めて動き、学校も、先生の実績を厳しくみて勤務条件（含む任期）を決めているようで、厳しい環境の中で、働いているとの印象を持ちました。

日本は、これとは異なる環境と思いますが、日本の先生が、誇りを持ちつけられるような仕事ができるように、親や地域社会からの心・力・資金の支援が、適切な批判とともに必要と感じます。